

学習形態 新型コロナウイルス非常事態のためネット上で講義。自学。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

### 『真仏土』・『化身土』について

今回からまた新たに『教行信証』を学ぶことになりましたが、今度は浄土の方から見つめていこうという事に致しました。佐々木さんや橘さんからのご意見もありましたし、前回の講義で申しました「すでにして願（悲願）います」という事がどうも引っかかっておりまして。「すでに」という事は、我々が仏道を歩もうと歩まなかろうと関係なく、報化二土の本願がすでにあるわけです。我々が仏道を歩むことによって浄土が顕現するというのではないわけです。

親鸞以前の浄土教は、仏道を歩む中で浄土に生まれて悟りを得る、あるいは救われる、という行程の一端であったわけです。ところが親鸞は報化二土の本願がすでにあつたのだ、と。それは即ち、報化二土の浄土がすでにあるんだという事を意味しているわけです。

そうなりますと、これまで学んできた「浄土真宗に二種回向あり」という事の中に、この二土は入らないという事になります。もっと厳密に言えば、還相回向の後に配置されているので、還相回向の部として見られがちですが、そうじゃなく、この二巻は独立している、と見ることができるのではないかと。

そういうことを念頭に置きながら、『真仏土』・『化身土』巻から学んでいきたいと思えます。

### 課題32 再び、『教行信証』を学ぶにあたっての姿勢。

学ぶにあたっての姿勢ですが、これまで置き去りにしてきた疑問や引っかかりなどを顧みながら、新たな思考をもって考えていきたいと考えております。その一つとして上記に述べた「報化二土」から見ていきたいと思えます。

『正信偈』に①「報化二土正弁立」と出てきます。源信僧都の所ですね。『往生要集』のどこに書いてあるんでしょうかね。『教行信証』に引用されているのは、p330に「執心牢固」によって報と化に分かれる、と述べられています。でも報と化が明確に述べられているのは、むしろ善導大士、『安楽集』の道綽禪師までさかのぼることができます。

源信は善導や道綽の書物を引用して「報化二土」を論じてきているわけですね。善導も道綽の『安楽集』を受けて述べられています。真宗学では②「古今階定」と言われますのでまたべてみてください。にもかかわらず、親鸞は「源信が報化二土を正しく弁立された」と言ったのか。私にとってはここに興味を持ったわけです。

そもそも仏身について言えば、はじめ法身と生身が説かれ、大乘仏教が起こっていく中

で、その生身を応身と呼び、その間に報身を入れて、法身・報身・応身の三身が説かれていきます。そして報身は、大慧と大定と大悲を体として、浄土を建立する因として成立していくわけです。(興味のある方は仏身論を調べてみてください。面白いかも。)

さて、話を戻しますが、「報化二土」は道綽までさかのぼりますが、その前は曇鸞ですね。曇鸞は「法性法身と方便法身」です。だったら道綽が報化二土を正しく弁立したといってもいいはずですが。ところが道綽でもなく善導でもない、源信が弁立したというわけです。皆さんはこれをどう見ますか。

先ほど申しましたように報身・化身が判れるという事は浄土建立の因になるという事を意味しています。『安樂集』では「浄土中の成仏はこれ報身なり、穢土中の成仏はこれ化身なり」(聖全 p 383) と述べられています。ここではまだ「化土」が明らかになってはいないようです。善導においてもそう思われます。

(参考までに、『真仏土巻』 p 318 玄義分をご覧ください。ここでは報化の論議をしていますが、報土とは言いますが、化土とは言っていません。ただ、「化」のみを論じているだけです。『一切の法、みなこれ化なり』などと説かれています。)

それじゃあ、源信はどうか、と言いますと、『往生要集』を見る限り(そんなに勉強しているわけではないのですが)報化二土にまつわる明確な論説が見えてこないんです。親鸞がなぜ「報化二土を正しく弁立している」言い切っているのか。それを敢えて『往生要集』に尋ねれば

「衆生の起行にすでに千殊あれば、往生して土を見る事また万別なり。もし解を作らば諸経論の中に、あるいは判じて報となし、あるいは判じて化となすこと、みな妨難なし。ただ諸仏の修行、つぶさに報化二土を感ずることを知れ。……。もしは報、もしは化、みな衆生を成就せんと欲すなり。……。すべからく報と化を図度るべからず。」(聖全 p 890)

とあります。報化を見分ける人要はないんだ、と言われていました。ここをもって「正弁立」と言われているのか。それならば、あえて報化に分ける必要はどこにあるのか。平安時代の、ただ浄土と穢土をわけて浄土に生まれたい、というだけでいいのではないのか。親鸞は「報化二度」をもって何を言わんとしているのか。

それでは、親鸞聖人は七祖に対してどう見ているのか、『正信偈』でみると、

### 課題 3 3 『正信偈』における七祖の意味を浄土から見る。そして何故源信なのか。

- ① 龍樹・・・「証歎喜地 安樂に生ぜん」
- ② 天親・・・「得 蓮華藏世界に至ることを」
- ③ 曇鸞・・・「必 無料光明土に至れば」
- ④ 道綽・・・「安養界に至りて」
- ⑤ 善導・・・「即 法性之常樂を証せん」
- ⑥ 源信・・・「偏 安養に帰して」 「報化二土を正弁立」

### ⑦ 源空・・・「即 寂靜無為の樂に入る」

というように、浄土そのものを表現する文言で述べられ、化身土を意味する文言は、源信以外述べられていません。これは勿論「真実行」に述べられているので、真実報土を求めることが主題になっているから、化身土を述べなかつた、とも言えるでしょう。

こうなれば、「化身土」はそんなに重要な事柄ではない、と誤ってしまいがちですが、それならば、本末二巻までして述べなければならなかつた理由はどこにあるのか。それを探るために『教行信証』の書き出しに注目してみたい。そういたしますと、御存じの通り各巻で「案ずる」と「顕わす」と使い分けていることがわかる。使い分けているという事は、親鸞聖人は「案ずる」と「顕わす」とに十分意識している、と見るべきであろう。

課題34 『教行信証』は何を顕わそうとしたのか。

教巻・・・「謹んで浄土真宗を案ずるに・・・、真実教を顕わさば、」

行巻・・・「謹んで往相回向を案ずるに、大行あり、」

信巻・・・「謹んで往相回向を案ずるに、大信あり。」

証巻・・・「謹んで真実証を顕わさば、」

真仏土巻・「謹んで真仏土を案ずれば、」

化身土巻・「謹んで化身土を顕わさば、」

まず、「案ずる」と「顕わす」との語彙的意味を把握しておこう。

「案」という漢字は「机」という意味。木の上に寄りかかり安居するところから机を意味するそうである。そこから派生して「考える」という意味になる。あるいは草稿という意味もある。「顕」は頭の明なる飾りの事。だから頁（かしら・こうべ）を書く。右は「日」の下に「糸糸」と書くが、これは「細明」の義とされている。したがって「あきらか・分明・あざやか・露出・あらわる・あらわす等」を意味する。

また「アラワルル」の別において「顕」は「キツト明にマガヒなく照り耀く程にあらわるること」と説明されています。【大字典（講談社）】

したがって「顕わす」という事は、明確に明らかになっていることを示す、という意味があるのでしょうか。そういう事から伺うに、「教」と「証」と「化身土」は既に明らかになっている事柄を示す、という意味になってまいります。ここで、「もうすでに明らかになっていることを、何故あえて示す必要があるのか」という疑問も出てまいります。それを裏返せば、「こんなに明確になっているのに、世の人は全く気付いていない」という背景があったのでしょうか。

ここに親鸞は「教証」と「化身土」を世に示していかなければならないという使命を抱いたのではないかと推測するわけです。

そうなりますと、「教証」と「化身土」において、私たちに何が見えていなかったのか、という課題が突きつけられてくるわけであります。

そういうことを念頭に置きながら、「真仏土」を参考にしながら「化身土」を頂戴していきたいと思います。

まず表題ですが、底本では表紙には「顕浄土方便化身土文類六 本」と書いてありまして、その裏に『観経』の意と『阿弥陀経』の意、そして願文等が書いてあります。この二つの「意」は朱色で書いてあります。底本は下書きみたいなものですが、だからこそ宗祖の心が見え隠れするものです。この二つを何故朱で書いたか。このことは念頭に置いておきましょう。

次に、次のページの表題。底本では「顕化身土文類六」とあり、その右に「浄土方便」の四字が補記されている。それはなぜか。ただ書き忘れた、という事もありうる。でも前の紙に「顕浄土方便化身土文類六」と書いているし、書き出しなので、書き間違えたら別の紙を使うという事も考えられるわけです。とすると、だいぶ書き進んでから気付いたという事でしょうか。

ちなみに『真仏土』では「顕浄土真仏土巻」の「浄土」が同様に右側に補記されています。という事は、教行信証は「浄土の真実を顕わす」という事で、真仏土と化身土はもうすでに浄土の事だから、書く必要がないと思われたのか。

しかし、これから「浄土の真実」ではなく、「浄土の方便を顕わ」さなければならぬ、と思いつかれたのではあるまいか。それで『真仏土巻』では「浄土」を、『化身土巻』では「浄土方便」を付け加えることにされたのではないかと推測されます。

したがって、『教巻』『証巻』をもって「浄土の真実」を顕わし、『化身土巻』をもって「浄土の方便」を顕わす、という『教行信証』の主旨があると思われるのであります。

(余談になりますが、谷大の大学院の広瀬ゼミで、「顕」について「浄土を顕わす真実の教・行・信・証」なのか、あるいは「浄土の真実を顕わす教・行・信・証」なのかという事で議論したことがありました。結論が出たのか出なかったのか覚えていませんが、すごい盛り上がったことは覚えています。今回の「顕浄土方便化身土」についても併せて考えると、また視点が変わってくるかもしれません。)

## 第二部

### 『化身土巻』に学ぶ

さて、あらためて『化身土巻』に学んでいきましょう。

まず、仏は「無量寿仏観経の説のごとし、真身観の仏これなり。」とされています。そして土は「観経の浄土これなり。・・・すなわち懈慢界これなり。・・・すなわち疑城胎宮これなり」と言われます。

まず、ここを検討していきたいと思います。仏は真身観の仏と言われます。これは『観経』の第九観でいわれる仏の事です。土は『観経』の浄土。この『観経』というのは釈迦と韋提希との間に起こった出来事、つまり韋提希が救われて、韋提希は「釈迦がい

なくなった後の世の人々が救われるのは、どうすればいいのか」と尋ねるところから、「観」が説かれていくわけですね。(p 95) この未来の衆生というのは我々の事です。釈迦という仏がいなくなる、という状況の中で救われるためには「観」ずるしかない、というわけです。つまり言ってしまえば「観仏」であり「観土」となるわけです。現前するわけではなくて、観察する仏であり、観察する土なわけです。それはどういう意味を示すのか、と言えば、釈迦がいなくなる、という事が必須条件になっているわけです。

それを言い換えるならば、釈迦の往生という事がポイントになってくるわけです。釈迦がいなくなるという事は釈迦の死ではなく、釈迦の涅槃というわけですけど、それを言い換えますならば、釈迦の往生(双樹林下往生)が中心であるわけです。

元来、仏教というのは、釈迦の説法から始まります。しかし釈迦がいなくなったら終わり、という事なら普遍的ではない。仏教が普遍的ならば、釈迦以後も説法がなされなければならぬわけです。それが韋提希の問いになって出てきたのであろうと思います。

『観経』を見ていただければいいんですが、かいつまんで申しますと、韋提希がアジャセやダイバによって苦しめられるわけです。そして韋提希は釈迦に愚痴をこぼすわけです。そして「このような苦しみのないような処を教えてください」と頼みます。それで釈迦はいろんな世界を見せるわけです。

そうしたところ、韋提希は阿弥陀の浄土を選び取るわけですね。その時釈迦は微笑むわけです。親鸞はこの「微笑み」に大きな意味を見出していきます。このことは後に出てきますので(p 331)、触れませんが、これによって釈迦生前中の説法と涅槃後の説法が成立していくわけです。つまり仏教の普遍性を示す教学が仏教が成立するわけですね。ですから、私たちにとって、この『観経』の仏身・仏土は絶対に必要なものとして受け入れるべきである、という事を意味しているわけです。

しかしながら親鸞は、私たちが立つべき仏身・仏土として肯定しながら、それを「懈慢界」「疑城胎宮」という言葉で批判してくるわけです。これが化身土の意味でしょう。肯定しなければならない自分の立脚地を批判していく、だからと言ってそれを捨てるわけにはいかない現実なんでしょう。

その親鸞聖人の生涯においては、比叡山時代、釈迦滅後の仏教、大乘仏教という自己肯定のうちにも、周囲の現実を見れば否定せざる負えない批判意識が芽生え、源信(恵心僧都)の横川に足しげく通われたといわれています。

ここで親鸞は、この現実の上に「報化二土」ということを正しく聞いたと領かれたに違いない。「正弁立」とは源信が「正しく弁立した」という事よりも、親鸞が、「正しく聞いた」という事でしょう。この時、源信はだいぶ前に亡くなってはいるものの、親鸞時代の倭国の人として同時代に生きた人として『正信偈』に「報化二土正弁立」とうたわれたのでしょ。

今回はここまでにします。

(つづく)